秋櫻子と山俳句、就中に山岳俳句

今田　清三

秋櫻子は、俳句に色彩と外光の明るい色調を取り入れ、俳句を室内から室外へと解放し、俳句における美意識に一大変革をもたらした。その端的な例は「山」で、それまでの俳人たちが、知りもしなかった日本アルプスなどの風景の美しさを詠んだ。

秋櫻子の山俳句の端緒を探れば、『葛飾』収載「大垂水峠の春」〈高嶺星蚕飼の村は寝しづまり〉等十句に遡る。以下、秋櫻子の「山」に係わる作品を概観する。

『葛飾』「赤城の秋」〈コスモスを離れし蝶に谿深し〉等十一句。『新樹』「大垂水峠」十二句、「上高地」十句、「菅平の雪」十八句。『秋苑』「湯檜曾の雪」十句、「岩原スキー行」十二句、「浅間山」十一句、「乗鞍岳」〈雪渓をかなしと見たり夜もひかる〉等三十三句、「大菩薩嶺」十句。『蘆刈』「山国初夏」二十七句、「磐梯山と檜原湖」五十句、「裏磐梯新緑」十一句。『古鏡』「磐梯噴火口登攀」二十五句、「八風山」二十句。『磐梯』「赤城山探鳥行」〈慈悲心鳥わきつぐ霧の谿ふかし〉等四十五句、「磐梯山の秋」二十五句、「高尾山」三十二句。『重陽』「碓氷峠」十一句。『霜林』「大垂水峠旧道」十句。『残鐘』「木曾王瀧」三十六句。『歸心』「箱根越」十七句、「小佛峠」十一句、「雪解の谿・谷川温泉付近」〈山櫻雪嶺天に声もなし〉等二十二句、「入笠山」十六句。『玄魚』「霧ヶ峰」十二句、「穂高奥宮」三十句、「蔵王登山」十一句。『蓬壺』「立山」〈龍胆や巌頭のぞく剣岳〉等二十七句、「乗鞍岳」二十四句。『旅愁』「赤城山」九句。『晩華』「白馬岳」十一句。その他二百二十三句など計八百一句だが、これは高原や観望俳句を除き、それらを含めると優に千句近くに及び、まさに風景作家の面目躍如である。

本稿は、秋櫻子の「山岳俳句」に的を絞る。

「山岳俳句」とは、「俳文学大辞典【普及版】」（角川学芸出版）に、次のようにある。

俳句様式。山岳に関わる俳句表現をいう。山岳文学の一分野を形成する。わが国では、芭蕉の月山登山がその先駆をなす。文学としての「山岳」の発見は近代になってからであり、俳句史の上では大正四年（一九一五）の河東碧梧桐の日本アルプス縦断記『雪線踏破七日記程』があり数句見られる。昭和期に入って石橋辰之助、水原秋櫻子によって拓かれ前田普羅、福田蓼汀と続き、松本たかしにも秀作が見られる。しかし、誰もが山へ行って詠んだ作をもって山岳俳句ということはできない。山岳俳句とは、山岳に対して夢と憧憬を生涯持ち続け、自らの

足で山へ登った俳人とその作品にのみいえることで、そういう人を山岳俳人と呼び、他と区別する重要な要素となるといえる。

秋櫻子は述べる。（全集第六巻「俳論」山岳俳句）

山岳俳句家の第一の資格は、多くの山岳に登った経験を有することであるが、少なくとも三千米級の山を五つは征服していなければいけないと思う。低い山に登ったのでは山と真剣に立ち向うこともできないし、その真剣に立ち向うことによって山が示してくれる心にも触れ得ないわけだ。

山岳の基準を仮に「三千米以上」と定めれば、秋櫻子の登頂した山岳は、富士山（3、776m）、御嶽山（3、067m）及び乗鞍岳（3、026m）の三つである。学生時代に登頂した富士山に係わる句はなく、御嶽山は学生時代に二度登り、最初は弟と大滝口から、翌年は黒沢口から一人で登り、その後の登頂において『葛飾』「木曾御嶽」〈雷鳥もわれも吹き来し霧の中〉他の作品がある。

秋櫻子は述べる。（全集第六巻　同）

俳壇では僕をも山岳俳句家の一人として認めてくれる。（中略）僕をしてこの資格を得せしめたものは、昨年発表した乗鞍岳の連作であろう。

乗鞍岳の作品（『秋苑』収載）を掲げる。

番所原をゆけば乗鞍岳の山容あきらかに見ゆ

乗鞍岳雪さやかなり桑の上に

飛驒に湧く夏雲嶺を越えきたる

雲の影落ちて夏山を深くしぬ

万尺の夏山にむかひ径つゞけり

鈴蘭小屋

蕎麦を植ゑその花咲かせ翁住む

雪渓をあふげばそこに天せまる

雪渓は夏日照るさへさびしかり

偃松帯ちかく

穂高岳雷雲の上に巌そびゆ

穂高見て深山の蘭を敷きいこふ

夏山を統べて槍ヶ岳真蒼なり

雪渓をのぼる

攀ぢがたき雪渓と見れば霧かゝる

雪渓をかきくらしゆく霧絶えず

雪渓に径はありけり踏みゆけば

なほ高き雪渓が霧のひまに見ゆ

肩の小屋にて

天騒ぎ摩利支天岳に雷おこる

摩利支天雷おさまりて霧吐ける

嶺うばふ霧たちまちに海をなせり

雪渓をかなしと見たり夜もひかる

霧さむく炉に偃松を焚きてねむる

夜明の疾風

偃松を馳せくだる霧の瀬を見たり

霧疾しはくさんいちげひた靡き
濃むらさき岩桔梗咲けり霧の岨
頂上登攀。頂上は剣ヶ峰を主峰とし、朝日岳、摩利支天岳、四つ岳等にわかる。朝日岳にて

岩に凭り霧にむせびて言をわする
岩をふみ岩をかき消す霧をよづ
剣ヶ峰頂上

三角標霧立ちのぼり渦巻けり
三つ立たす霧の祠のしづくせり
白米をあげし宝前を霧ながる
霧凝りて三柱の神ぬれたまふ
飛騨の国をうつろとなして霧湧けり
三角標霧に朽ちたり飛騨の霧に
下山

追ひせまる霧や雪渓をすべり下る
霧の海木曾駒ケ岳を浮べたり
霧の沢白樺みだれ潰えたる

野中亮介氏の『水原秋櫻子のある山岳俳句―何故、秋櫻子は乗鞍岳を目指したのか』（注1）より引く。

この連作で作者の心情がもっとも強く出た部分は「剣ヶ峰頂上」の六句であろう。ここには烏水や空穂の作品―つまり西洋の「アルプス」を日本の枠組みに当て嵌めてしまった文章や短歌―に触れかつ安井曾太郎を介してセザンヌの中の山岳に親しみ、それを日本の山岳に求めようとした秋櫻子にとって、初めて三千米級の山岳を制覇したという思いがもっとも色濃く滲む。それはこの部分の六句の最初と最後に「三角標」を据えたことでも想像できる。

登山者にとって三角標は目標の象徴であり、それを目にし、それに触れた感動は大きい。前に戻って引く。

秋櫻子は一高時代に読んだ小島烏水の『日本アルプス』により山岳への関心が芽生え、後に窪田空穂に師事しその日本アルプス詠を読むことで、文章ではなく短詩でもそのすばらしさを表現し得ることに驚愕しつつ、その地への憧憬をますます深めていった。

烏水（注2）は紀行文家で山岳家でもあることから日本アルプスの登攀は数知れないが、空穂（注3）は北アルプスに三回ほど登攀している。うち、大正十二年八月の北アルプス三回目の登攀が乗鞍岳で、当時の作品は『鏡葉』に収載された。秋櫻子が、〈乗鞍岳三つ立つ峰のふところに湛えて青き水のある見ぬ〉や〈高天に湛ふる水をめぐる雪わが見る今をかがやきいでぬ〉等の作品に接し、自らもその景色の素晴らしさを俳句に詠みたいと思ったであろうことは想像に難くない。この強い思いこそが秋櫻子を乗鞍岳に向かわせた大きな要因であろう。三度引く。

この連作三十三句が作られていた時期は秋櫻子にとって重要な出来事が起きている。それは山口誓子の「馬酔木」参加である。秋櫻子は「ホトトギス」同人であった誓子の協力を得るべく大阪馬酔木会俳句大会出席。そのまま誓子に会い五月号よりの「馬酔木」参加を決定づけている。同号は誓子の「射手の挨拶」と秋櫻子の「喜び迎へて」を併記し対外的にも誓子の加盟を宣言した。さらに、八月号からは連作俳句欄として「深青集」を新設し積極的に連作俳句に取組んでいった。その第一回の締切月である八月に秋櫻子は憧憬の乗鞍岳登攀を果している。中略。つまり「乗鞍岳」は秋櫻子にとって誓子と共に連作俳句を実践する象徴の場でもあった。

その後、連作俳句が一句の独立性を弱めることから秋櫻子がこれを排したことは遍く知られる。それはそれとして、秋櫻子は述べる。（『葛飾』第三版の自序）

おのが句集の評価を公にするのは慎みをわすれた態度だが、しばらくそれを許されるなら著者は『秋苑』が第一、『葛飾』が第二、『新樹』が第三に位すると思っている。という意味は、自分の考えを信じ傍目もふらず努力し得たということである。

この「努力し得た」という言葉には、四十四歳で登った乗鞍岳の汗も含まれているのであろう。本連作に係る有馬朗人氏の「秋櫻子先生の連作の試み」（馬酔木九十周年記念大会講演）（注4）より結論部分を引く。

秋櫻子先生の大きな業績として、連作俳句があったことをもう一度思い出してみましょう。そしてその連作がどうして終焉したかを考えてみましょう。その上で、東日本大震災の大津波のような大きな悲劇をどう俳句で詠むかを考えて、もう一度広い素材で連作を試みたらどうであろうか、そうしたことを私はお話した次第です。そのときは、必ず有季定型で一句一句の独立性を充分に考え、先ず一、二句力作、自信作と思えるものを作って、それを中心に起承転結を考え、秋櫻子先生の言われるように設計図を描いて構成していったらどうでしょうか。

この乗鞍岳以後、秋櫻子の三千米峰の登頂はないが昭和三十三年七月、六十六歳にして再び乗鞍岳に登頂する。乗鞍岳に対する深い思いの表れだろう。

二度目の乗鞍岳登頂時の作品を掲げる。

七月十三日。飛騨高山発、乗鞍岳に向かふ。平湯峠にて

焼岳の霧に獅子独活立ちなびく
雲のゐる山ばかりなり道をしへ
乗鞍岳肩の小屋にて

偃松原暮れぬ雪渓も暮れむとす
夜、雪渓のほとりに立つ

雪渓や信濃の山河夜に沈み
雪渓に下りてまたたく星おほし
雪渓に孤燈影落つ肩の小屋
雪渓を通る霧見ゆ天の川
眠るとき麓雪満つ天の川
十四日黎明、剣ヶ峰に登る

黒百合や星帰りたる高き空

残月のかゝる岨さへお花畠
岩桔梗岐れてしらむ登攀路
雲海に偃松青き磯をなす

頂上ちかく

七月の碧落にほふ日の出前
雲海や偃松鳴らす風吹き上げ
雲海やゆるがぬ巌の穂高岳
爽涼と焼岳あらふ雲の渦
暁紅に外れて夏逝く槍ヶ岳
横雲の煌々遠し御来光
雲海の波騒立てり御来光

剣ヶ峰に立ちて

石積みて頂かこむ岩ひばり
消えのこる雪こゝになし神います
片虹を飛騨に見下ろす峰の神

五の池付近にて

暮れはてて空のみ明しお花畠

肩の小屋

雪渓の迫る窓下や消燈す

初回の作品と比べ作品数と背景に違いを見るが、それは二回目の登頂であることの他、乗鞍岳自体の変遷にも起因する。すなわち昭和十六年、陸軍が高地実験所（高高度のエンジンテスト）のため敷設した軍事用道路は、終戦後は県道に指定。二十四年、観光バスの運行開始。四十八年、畳平（2、702㍍）まで有料道路が完成したのである。

従って秋櫻子の二回目の乗鞍岳は、麓から登った初回と比べ、標高三千㍍近い畳平まで車で行けたのであり、このことが作句に影響したのは自然の成行きだろう。

そして両者の決定的な相違点は、前者が連作の中心的位置における作品であるのに比し、後者はそうではないことにあり、これこそが前述した有馬氏の論説にも繋がることなのではなかろうか。

かくして秋櫻子の二度目の乗鞍岳登頂以降、時代は昭和、平成、令和と移り変わり令和三年秋、馬酔木は創刊百周年を迎え、乗鞍岳は当時のままに信州と飛騨の中天高く、確と立ち続けているのである。

〈注の一覧〉

注1　野中亮介氏が「九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程」三年時に著した論文である。

注2　小島烏水（1873～1948）は山岳家、随筆家、文芸批評家。著書に『日本山水論』、『日本アルプス全四巻』、『アルピニストの手記』他。

注3　窪田空穂（1877～1967）は歌人、国文学者。著書に『窪田空穂歌集』、『窪田空穂随筆集』他。秋櫻子は、大正九年より宇津野研主宰の『朝の光』を通じて空穂の「調べ」に対する教えに深く共鳴した。

注4　平成二十三年十月、「馬酔木創刊九十周年記念大会」における有馬朗人氏（天為主宰）の記念講演「秋櫻子先生の連作の試み」で、馬酔木第九十一巻第二号（平成二十四年二月号）に掲載。

五月号P.106～108「各地区馬酔木例会句会案内」

石川県の各句会、左記の通りに訂正・削除いたします。

金沢馬酔木会　宮口　征子　3回（金）
（麻田優香子宅×　×宮口　征子）

訂正　（会　場）金沢市泉野図書館
（担当者）小崎　淳子

白山馬酔木会　宮口　征子　1回前後
（千代女の里俳句館　×宮口　征子）

訂正　（担当者）岡村　清美　月20日

金沢馬酔木花杉句会　×宮口　征子　2回（木）
（フワビル2F　×宮口　征子）

訂正　（指　導）高橋　佳子
（担当者）下川嘉代子

削除

かたかご会　宮口　征子　2回（木）
（麻田優香子宅　宮口　征子）

（金沢馬酔木会と合併のため）

最近の座談会 名句集を探る

甲斐由起子『耳澄ます』
成田一子『トマトの花』
佐藤りえ『良い闇や』『ぺこぽこ宇宙』『いるか探偵QPQP』

司会●筑紫磐井
大西朋
望月周
望月とし江

●巻頭三句
矢島渚男
堀本裕樹
宮谷昌代
小路智壽子
吉岡乱水
東海林さくら

●今月の華
小沢真弓
正能文男

●俳句と短歌の10作競詠
坪内稔典
福島泰樹

●好評連載
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西朋　俳句へのまなざし
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
二ノ宮一雄　一望百里

宮崎斗士
「海原」第二回兜太祭吟行記

俳句四季 Haiku Shiki
2023年6月号
5月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180